

樂天主義のすすめ

遠藤周作

DAVON

読者のみなさんへ

この本をお読みになって、特に感銘をもたれたところや、ご不満のあるところなど、忌憚のないご意見を当編集部あてにお送りください。

また、わたくしどもでは、みなさんの斬新なアイデアをお聞きしたいと思っています。

「私のアイデア」を生かしたいとお思いの方は、どしどしお寄せください。これからの企画にできるだけ反映させていきたいと考えています。

なお、採用の分には、記念品を贈呈させていただきます。

青春出版社 編集部

PLAYBOOKS
プレイブックス

楽天主義のすすめ

昭和41年7月15日 第1刷



著 遠 藤 周 作

町田市本町田玉川学園3861

訂者 小 沢 和 一

発行所 東京都新宿区 株式会社 青春出版社
矢来町35番地

電話 (269) 7731~4 振替番号 東京98602

印刷・弘済印刷

製本・長生堂製本所

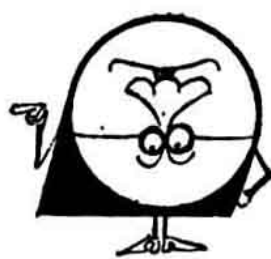
楽天主義のすすめ

——「狐狸庵閑話」より——

遠藤周作



PLAYBOOKS
プレイブックス



ウソツキ人間へ

……

69

オトボケ人間へ

……

61

イジワル人間へ

……

48

ウツカリ人間へ

……

24

イタズラ人間へ

……

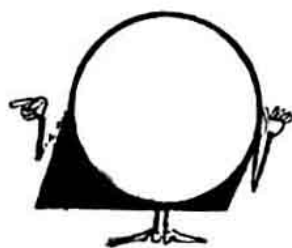
14

メイワク人間へ

……

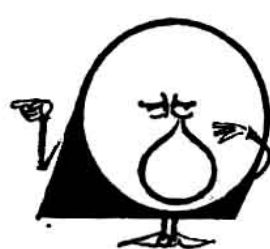
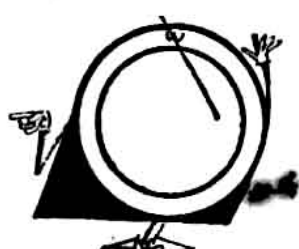
7

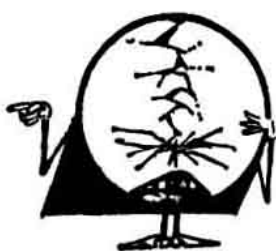
もくじ





人間ギライ人間へ …… 154	人間ギライ人間へ …… 138	ナマケ人間へ …… 125	ユウウツ人間へ …… 117	ホラフキ人間へ …… 106	メソメソ人間へ …… 95	マジメ人間へ …… 86
-----------------------	-----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------------





バカ人間へ

...

165

ハツタリ人間へ

...

176

ノゾキ人間へ

...

189

スキ人間へ

...

201

ヒステリー人間へ

...

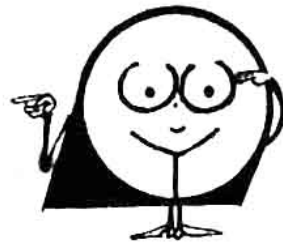
208

グータラ人間へ

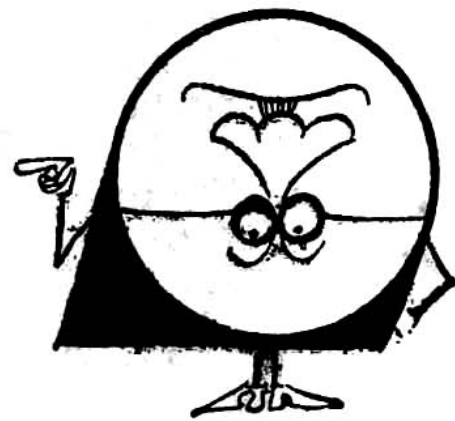
...

215

本文イラスト・紫藤甲子男



メイワク人間へ……



われは世捨人

題して狐狸庵閑話という。狐狸庵とは江戸日本橋を離ること八里、柿生かきおの村とよばるる山里に世を厭いとつて結んだ我が庵の名であるが、また、この狐狸庵閑話は、コリヤ、アカンワともお読み頂きたい。

昔、駒場に住んでいた頃、足しげく遊びにきた友だちも、流石さすがここまでは訪れることも稀である。昼は経を読み、夜は狐狸を友としとまではいかないが、読書に飽きると庵をとりまく雑木林

に遊ぶ野鳥の群を眺めて楽しみ、日暮れば夕餉ゆうげそこそこにすませて風の音、雨の音に耳すます世捨人の生活である。とてもとても、皆さまにお聞かせする話の種なぞない。近頃は年のせい
か、夜中なぞ廁かわやが近くなって閉口している始末である。

廁といえ、日本ではいつ頃から個人の家屋に便所をつけたのであろうか。京都の御所をその昔、拝観した折、白砂しいた廁を拝見し、昔の貴人もここに立って是我々下々しもじもの者と同じ恰好をされたのであるな、と胸しめつけられる感動に打たれたことがあったが、日本便所史という研究をなした学者はいない。未だその知識のないのを憾うらみとするのである。ヨーロッパでは長い間廁というものがなかった。ああいうものが一般の市民の家に出来たのは十九世紀以後だと言う。ヴェルサイユの大宮殿を見物したおり、私は広い宮殿内を駆けまわり、便所を探しまわったが遂に発見できなかった。華やかな夜会のたびに、ここに集まった侯爵夫人、子爵夫人たちは何処で用を足したのであろうか。彼女たちは宮殿をとりまく庭の樹かげで立ちションをやったということがアルコフオン博士の「秘めたる場所の歴史」という名著に出ている。彼女たちが長いペチコートに長いスカートをはいていたことは、映画その他で御存知だろうが、あの長いスカートは立ちションをするに好適だったそうである。

出る、出るでえ

終戦直後の列車に乗られた方は今でもはっきり憶えておられるであろうが、足のおき場もない満員の夜行の中で便意を我慢しなければならぬほど苦痛なことはなかった。もし人の体や頭をまたいで便所に行けば、せっかく確保した場所を失なうし、それに肝腎の便所にまでぎっしり人間が立っているのでは八時間なら八時間、歯をくいしばって耐えているのは滑稽以上に悲惨だった。ある日、こんな夜行に乗って、やっと列車が東京を離れ、小田原あたりまでさしかかった時、うとうとしていた我々の耳もとで一人の男が、臭^{くさ}つと叫んだ。

「臭^{くさ}つ。臭いなあ。だれだ。屁^へをひつたのは」

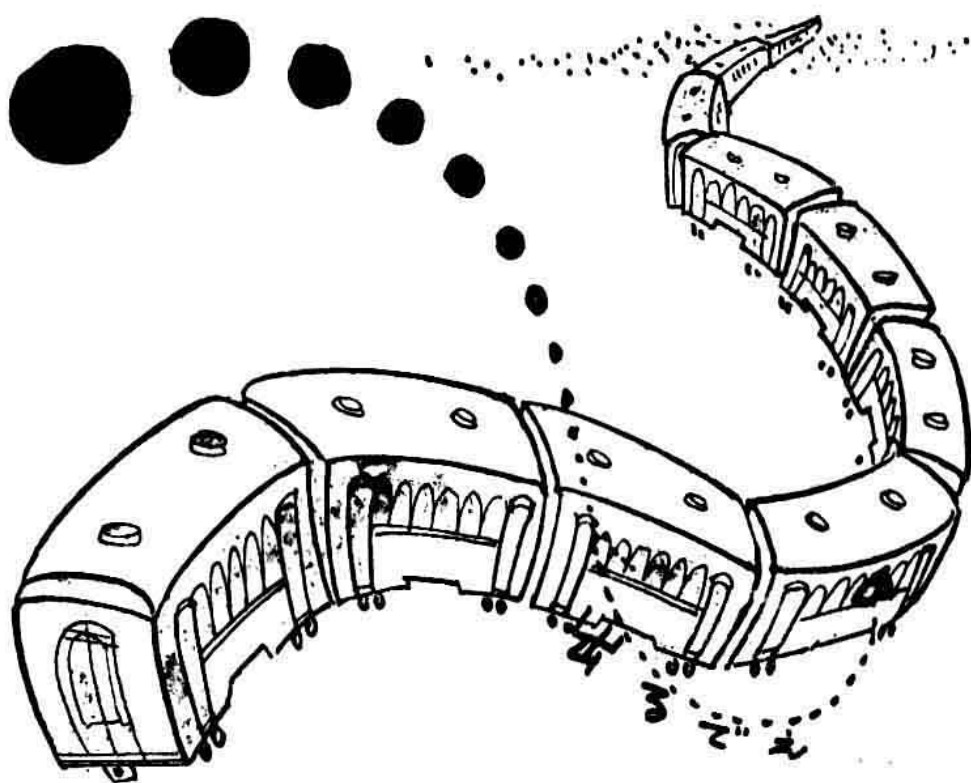
周りの者がキョロキョロとあたりを見まわしている時、かの男は真向いの席に腰かけている爺さまを指さして、

「この爺さんだ。この爺さんだ。爺さん、あんたの足もとにウンコが流れとるがな」

「す、すみまへん。東京を出る時から腹が痛うて、便所に行こう思うたんやが、この始末や。行けへんで、ここで、やってしもうたんやでえ……」

見れば爺さまのカーキ色のズボンの裾がもう黄濁した水で汚れておる。臭気フンブンとあたりに漂い、みな鼻つまんで臭え、臭^{くさ}つ、臭えなあ。しかし事情が事情だから我慢して一刻も早く眠ろうと目をつむっている、爺さまがまた腹を押さえて、

「み、みなさん、また出ます。また出ます。もう我慢でけんで」



それ大変だというので周りの者が窓をあけ爺さまの体をつかまえてやり、お尻だけ窓外にむけさせて用を足させることにした。ブリブリ、ブーブー。目茶苦茶な話だが終戦後のすさまじい列車状況ではこれもやむを得なかったのである。ところがこの爺さまの下痢は二十分か三十分おきに催すらしく、そのたびごとに、「出る。出るでえ、皆さん、出るでえ」

わめきだすのである。また皆が体をつかまえ、しなびたお尻を窓から出させてやる。京都につくまで、「出る、出るでえ」「大変だ。またか」「窓あける、尻ださせろ」「出る。出るでえ」で、一同、ゲツソリとなった生々しい記憶を私は未だに持っている。

洗面台を便器にする男

外国人の宅を訪問して、便所を借りることは大変失礼とされている。食事やパーティによばれる時は訪問前に必ず事をすませて、出来るだけ向こうで非礼な場所をきかぬようにすべきだそう。やむを得ぬ場合は必ず同性の人にそつと訊ねるのは勿論のことだが、その時もあからさまにW・Cなどと言つてはいけないと聞いている。

リヨンという都市で勉強していた頃、私の住んでいた部屋の隣にマルセロ・カルサオというブラジルの留学生がいた。この男は気が弱く、人なつっこく、寂しがり屋の青年だったが、ただ一つ閉口なのは、自室の洗面台の中に小便をすることである。彼の洗面台についている排水管は隣室の私のそれにつながるから、その音が壁ごしに聞こえるたびに不潔な気がして仕方がない。特に夏ともなれば、甘酢っぱいような彼の尿の臭いが私の洗面台から漂ってくるような気がする。

「やめれ」と私は言った。「洗面台は便所じゃないぞ」

「しかし、流せば同じじゃないですか」

「同じじゃない。やめれ。やめねえと本当に怒るぞ」

ブラジルの学生は怖れをなして黙りこんでしまった。二、三日の間、隣室から彼が洗面台の中に放尿する音は聞こえなくなった。

だがあれは四日目の真夜中のことであつた。私は夢の中で深川のほとりを歩いていた。左手の林の遠くからサラ、サラと溪流の流れる音が聞こえてくる。サラサラ、サラサラ。

目をさました。夢ではないのにサラ、サラと言う^{じょうじょう}窸々たる音はまだ耳に聞こえてくる。ははあ、あの野郎がまた洗面台の中にオシッコをやりだしたのだな、とすぐわかった。私は咳ばらいをして、彼にわかつていゝるぞと言うことを知らせた。

エヘン、エヘン

果せるかな、サラサラという音が突然やみ、部屋は深い沈黙に戻った。が、やがて、^{こら}泳えきれなくなった彼が小刻みに放出する音が、チュツ、チュツと始まった。出してはとめ出してはとめているのである。

エヘン、エヘン

チュツ、チュツ

最後にたまりかねたのか、ジャアーと全部出してしまったようである。

翌朝、私は彼の部屋に怒鳴りこみ、ぼくの洗面台についている排泄管を消毒してもらいたいと命じた。マルセロは情なそうな顔をして薬屋から消毒液を買い、半日かかって、排水管を消毒していたが、これは自業自得というものである。

あれから十年たった近頃、私は突然、ブラジルの新聞社のオリビエ氏という特派員から電話を受けた。

「あなたは、マルセロ・カルサオを御存知でしょうか」

「知っております」

「彼と私とは親友です。日本にくるに当って彼からは是非、あなたをたずねろと言われました」

我々は銀座で会い、オリビエ氏とその夫人と三人で食事を共にしたが、かつての小便男マルセロ・カルサオ君は今やブラジルで新進作家として活躍しているとのことだった。オリビエ氏は彼からことずかっていた手紙を私に渡してくれた。

「ああ、古き、懐しき友よ」と彼は冒頭に書いていた。「十年の歳月は我々の間に流れたが、君のことは吾が心にいつも残っている。我がことも君の記憶にあるか」

私はチュッ、チュッというあの音が心に甦るのを感じた。それは妙になまなましい音にかかわらず、もう一向に不快な感じもなく、むしろ、懐しい、親愛なる音のように思われたのである。

イタズラ人間へ……



元祖「イタズラ氏」の告白

故火野葦平氏ひのあしへいと故中谷宇吉郎氏なかやうきちろうと地方講演旅行に行ったことがある。

小さな都市の公会堂で講演が終ると、町のお偉方の宴会があった。正直いって、私はこういう見知らぬ人との宴会が苦手だから、火野さんの横で、小さくなっていた。

すると横で芸者が市の助役とか言うチョボ髭さんにこう囁いているのが耳に入ってきたのである。

「火野さん言うたら、有名な小説家と知っとるけど、あの遠藤ちゆう人は、助役さん、何する人ですかあ」

「わすもよう知らんがのう」助役は横目でチラツと私を見ながら呟いた。^{つぶや}「何でもイタズラばかりしよるお人じゃそうな」

これを耳にした私は大いに腐り、酒をあおった記憶がある。

勿論、私はイタズラは嫌いなほうではない。しかしこの助役が言うようにイタズラを誰にも仕かける変質者ではない。今日までの私のイタズラは友人たちに聞いて下さればわかるが、せいぜい、極く親しい仲間や先輩たちとやったり、やられたりと言う範囲にとどまったぐらいのものである。

尻の毛までもぎとるイタズラ

イタズラには三つの種類がある。

第一は、相手への思いやり、迷惑も考慮せず、ただ相手をひっかけるという快感でやるイタズラだ。これは本当のイタズラと悪フザケとを混同したもので、私の最も嫌悪するものである。

たとえば吉展ちゃん^{よしのぶ}が誘拐された時、悲嘆にくれている御両親にからかいの電話をかけた馬鹿がいた。こういう連中は相手への思いやり、迷惑も考えぬ無神経の持主で、本当の意味のイタズ